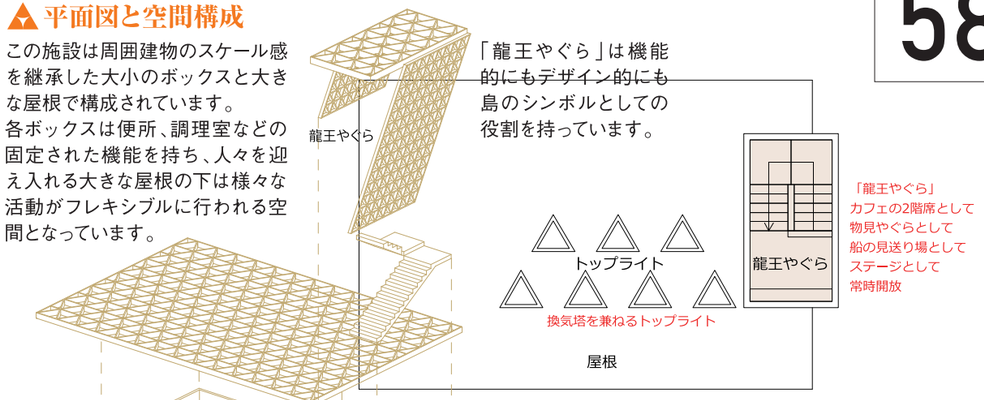
八幡浜大島交流センター

島の「記憶（おもい）」と来島者の「記憶（おもいで）」をつなぐ場所

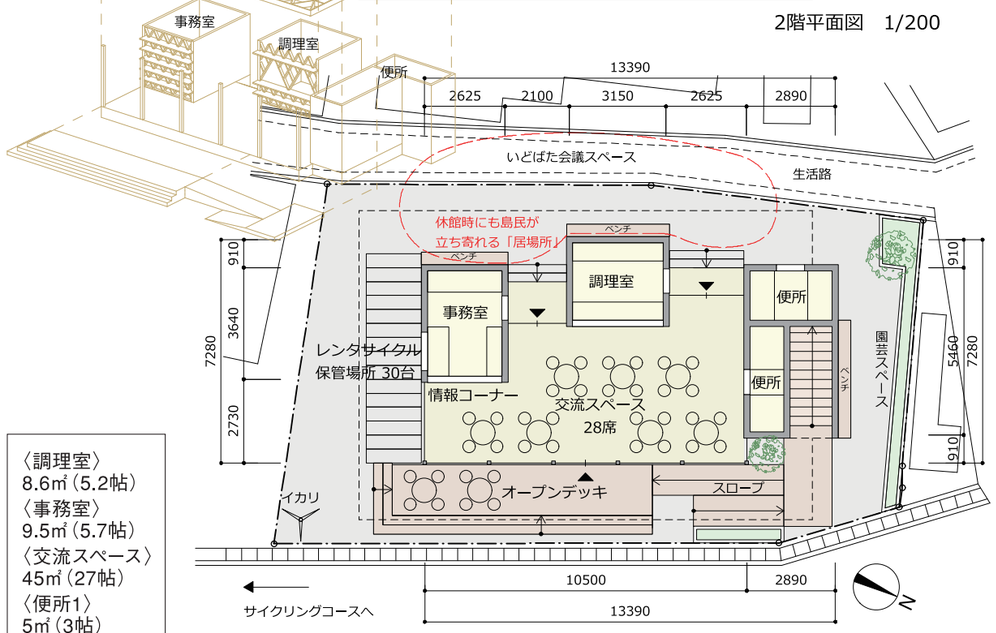
この施設は島民にとって気軽に立ち寄ることができる、親しみやすく島の風景に馴染む建築です。
同時にこの建物は正三角形の安定的かつ強いイメージで構成されたシンボリック（象徴的）なデザインにより、
島を訪れる人々の記憶にいつまでも残ります。

平面図と空間構成

この施設は周囲建物のスケール感を継承した大小のボックスと大きな屋根で構成されています。
各ボックスは便所、調理室などの固定された機能を持ち、人々を迎え入れる大きな屋根の下は様々な活動がフレキシブルに行われる空間となっています。



2階平面図　1/200



〈調理室〉
8.6㎡（5.2帖）
〈事務室〉
9.5㎡（5.7帖）
〈交流スペース〉
45㎡（27帖）
〈便所1〉
5㎡（3帖）
〈便所2〉
5㎡（3帖）

配置図・1階平面図
1/200

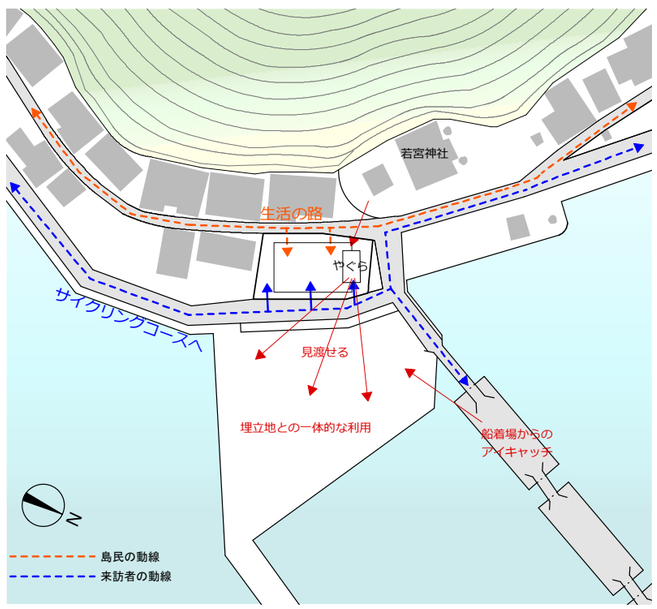
配置計画

海側と山側の2つのファサード

敷地は島の人々が日々の暮らしの中で行き来している幅2mほどの山側の道と、海岸沿いの「サイクリングコース」へ続く道路との間に位置します。
建物の海側は島を訪れる人々を迎え入れる大きな庇によって開かれた外観を持ち、逆に山側は島の人々の暮らしの風景を継承するように大小のボックスが空間を緩やかに分節し、居心地の良い空間を形成しています。

空間的広がりをもたらす龍王やぐら

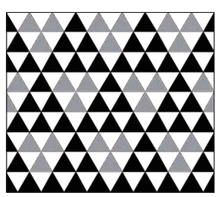
島の玄関口に位置するこの建物には、船着場に着岸する船の上からの視認性を高めるシンボリックなやぐらを設けます。
夏に盆踊りが開催される前面の埋立地と施設との一体的な利用が想定され、埋立地全体を見渡すことができるステージとしての利用や船で島を離れる旅人たちを見送るデッキとしての利用ができます。



意匠計画について

正三角形によるウロコの文様

八幡浜大島には龍神伝説が伝わり、地大島の龍王神社には「海の守護神」でもある龍王が祀られ、大漁を願う島の人々の心の拠り所になっています。また島に多く生息する蛇も島の人々にとって身近な存在であることから、「ウロコ」文様をモチーフに正三角形のパターンをデザインとして取り入れています。



モチーフの「ウロコ」文様

竜王神社

島の日常風景の継承

この新しい施設が島人にとって親しみのある建物になるように山側のボリュームは小さく分割し、その隙間越しに海を眺められるようにして島民の日常の風景を継承します。各ボリュームの外壁は島に昔から存在する木造住宅と同様に杉板を採用し、壁沿いにはベンチなどを設け、施設の営業時間以外でも気軽に集まれる居場所を創出します。

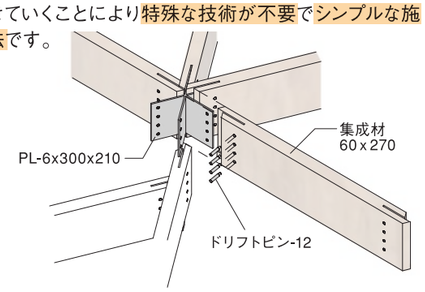
構造計画について

意匠と構造デザインの一貫性

意匠的なモチーフとした正三角形のウロコパターンをそのまま耐力壁と床版（屋根スラブ）の構造として採用しています。屋根スラブはそのまま天井仕上げとなり、透明感のある安全で軽やかな構造となっています。

施工性を高めコストを抑制するモジュール構造

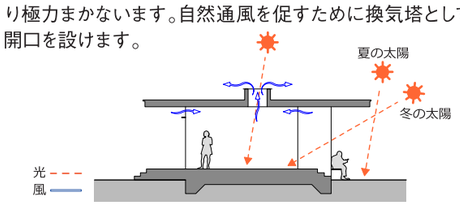
床版は方向性のない正三角形モジュールのメッシュ構造で、基本的にすべて同じ規格材で構成されています。また、正三角形モジュールの木材は短尺となるため、材の運搬は大型トラックを必要としません。
正三角形モジュールの床版、壁版は各パーツ（木材と鉄板）をピンで留め地組みし、版状となった状態でそれらを組み合わせていくことにより特殊な技術が不要でシンプルな施工方法です。



環境への配慮

- LEDとタスクアンビエント照明を採用
- 長く伸びる庇によって日射遮蔽に対応
- 換気塔を兼ねたトップライト

施設利用時間の大部分を占める日中の照度を自然光により極力まかないます。自然通風を促すために換気塔として開口を設けます。



県産の自然素材の使用

地域の木材(スギ・ヒノキ)や菊間瓦等を積極的に活用して地域に貢献するとともに親しみと温もりのある空間を実現します。

島に見られる杉板の外壁

瓦

青石

海に向かって大きく開かれた外観

船で島に訪れた人々を迎え入れるように大きく伸びた庇とアイキャッチとなる「龍王やぐら」

龍王やぐらからの景色

島民の日常の風景を継承した山側の空間

生活路から建物に切り取られた海が見える。
施設が閉まっているときも島の人々が気軽に集まってひとやすみできる場所

島の日常的な風景

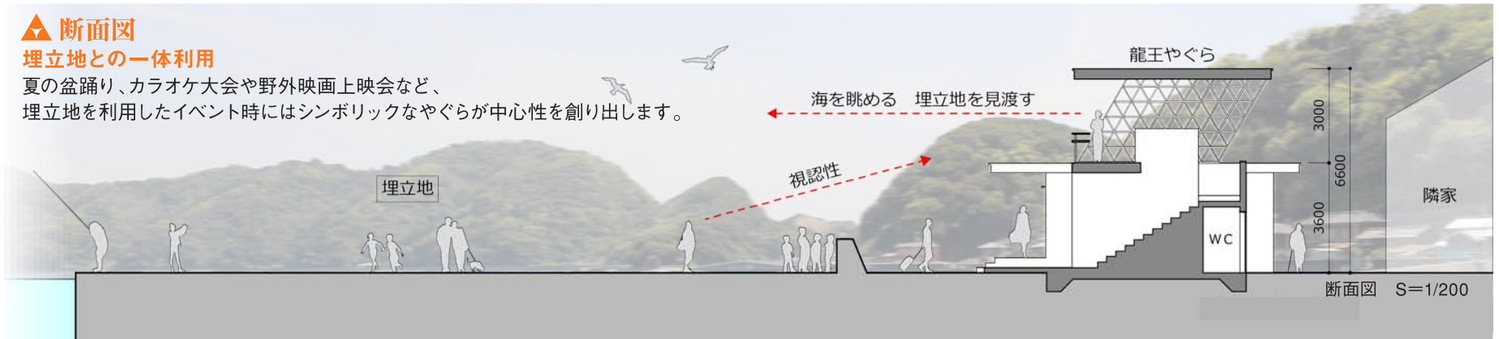
季節や時間によってフレキシブルに利用可能な交流スペース／島民の会議

季節や時間によってフレキシブルに利用可能な交流スペース／観光拠点

断面図

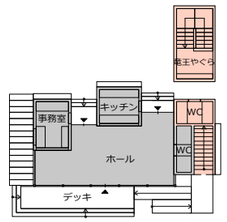
埋立地との一体利用

夏の盆踊り、カラオケ大会や野外映画上映会など、
埋立地を利用したイベント時にはシンボリックなやぐらが中心性を創り出します。

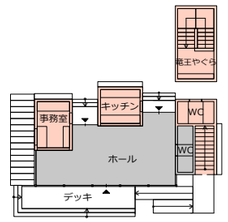


季節・時間帯によるフレキシブルな施設の利用

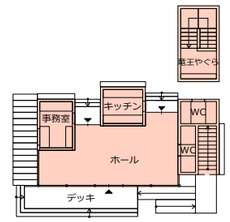
島への交通が連絡船に限られていることから、季節や天候による欠航などにより島を訪れる人数に大きな変動が考えられます。その変動にもフレキシブルに対応できるように、施設は開館時間をゾーン毎に設定します。屋外からアクセス可能な便所と「龍王やぐら」は利用者に常時開放しています。ボックスに分けられた事務所、調理室はそれぞれ外部からアクセスするできるようにすることで、観光客の少ない時期にも島の人々の利用がしやすくなっています。



施設が完全に閉まっている状態
（冬季や夜中）でも屋外から
アクセスできる便所と龍王やぐら



施設を来島者に開放していない
時間に島民が事務所や調理室を
利用できる



施設を完全に開放している状態。
島民の集まりなどでも利用する

観光拠点としての位置づけ

オベントウ（島弁）をメインとした施設運営

この施設の利用者は観光客から島に住んでいるお年寄りまで様々です。どんな利用者にも喜ばれ、施設以外の場所での食事にも対応でき、さらにこの施設で働くスタッフのオペレーションのしやすさなどを考慮して、お弁当スタイルのサービスを中心にすることを提案します。

さらに島のサイクリングルートにはおすすめの「ピクニックポイント」を設定し、そこで食べるお弁当（島弁）の販売拠点という位置づけや、その「ピクニックポイント」の清掃、ごみ拾いのボランティアの活動拠点とするなど、施設の役割を明確にします。

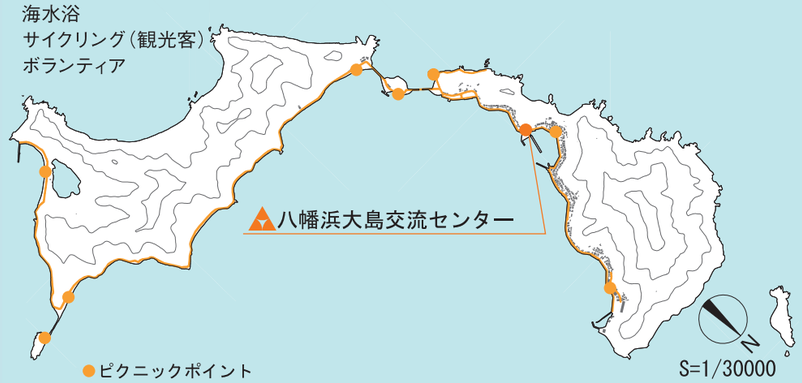
島弁のイメージ

想定される施設利用者

島民
釣り人
海水浴
サイクリング（観光客）
ボランティア

想定される利用食材

ひじき、いか、あわび、うに、あおのり、なまこ



設計の進め方

柔軟性のある設計プロセス

この建物は何よりも島に暮らす人々の生活を第一に考え、島の風景に馴染み人々が集まりやすい施設を目指します。そのために実施設計時には島民の方々とワークショップを開催し、施設のソフト面に関して議論を交わし、より良い場作りを進めていきます。
その結果として設計内容のアップデートも時間的コスト的に可能な範囲で行っていきます。

徹底したコストコントロール

全体予算内での実現のために徹底したコスト管理をし、イニシャルコストとランニングコストのバランスを考慮しライフサイクルコストの試算をしながら工法・機器の選択をしていきます。

維持管理コストの削減

建物の多くを占める木質部分の仕上げには植物系自然塗料を採用し、誰でも保守ができるようにします。設備機器に選定にあたっては、ライフサイクルコストを試算します。

施設のロゴマーク

施設の理念を表現するロゴマークは建築デザインのモチーフにもなっている正三角形とみかんの丸い形を組合せ、「島民」と「来島者」と「八幡浜市」が一体となって取り組むイメージを形にしました。
このロゴマークは施設で販売するお弁当やお土産などに積極的に利用し、施設のイメージを広く認知してもらいます。